

洪水物語 上

飛泉

特71

561

三善和氣

301176-000-0

特71-561

洪水物語 上

眞下飛泉/作, 三善和氣/曲

M40.9

CEH-0018



洪水物語

上

飛泉

特71

561

近
事
唱
歌

文
二
致

特別
561



77W13843

序

人間の心の奥の眞善美は、得て非常の場合に美しく咲くものである、この美しく咲いた眞善美を、最もよく歌ふのがわれわれの本能である。歌は笑顔で歌ふのもあるが、また涙を以て歌ふのもなければならぬ。わが洪水物語は非常の場合に咲いた人間の心の奥の眞善美を、涙を以て歌はうと心がけて作り出した。殊に私は今度の洪水で最もはげしかつた京都府下の由良川の岸に生れたもので、現に父母の家は二階から五尺も浸水致しました、幸ひ流れはせなんだが、近所には見るからあはれなのが澤山あるのです、こんな縁故もあるので、私はどうか皆さんの深い同情を、こんな哀れな人達にむけたいと、それやこれやで、こんなものをお目にかけるのです。

著者

洪

洪水物語

ト (調二拍子)

三善和氣作曲



5. 5 1. 1 | 2. 2 5. 5 | 3. 3 3. 1 | 2. 0 |
 ナニヤノマイコガドドント



3. 3 3. 3 | 5. 5 3. 1 | 2. 2 2. 2 | 5. 0 |
 ニツチシラセテナルケレド



5. 5 5. 5 | 6. 6 6. 6 | 5. 5 3. 1 | 2. 0 |
 オテラノカネモヒニナツテ



3. 3 5. 5 | 1. 1 3. 3 | 2. 2 2. 3 | 1. 0 ||
 オニオントナルケレド

洪水物語 上

真下飛泉

太郎の船

一、お宮の太鼓がどどどんと

洪水をしらせて鳴るけれど、

お寺の鐘も火になって

ごーんごーんとなるけれど、

二

太郎は三歳スヤ〜と
宵の口から寐て終ひ
父上母上忙しなう
片付けなさるも知らなんだ。

三

丸提燈が雨の中
しぶきの中をかけぬけて、
提がきれたあぶないぞ、

四

にげよと云ふ間もあらばこそ、

あらすさまじやどろ〜と

闇にも響く波の音

水は忽ちせめよせて

海の世界と變つたが、

五

相も變らずスヤ〜と

家の二階の長持の

中に太郎は移されて
覺めず寐てゐて知らなんだ。

六

窓にすがつて父母は
南無や金比羅大權現
どろろ命はお助けと
両手を合せ伏し拜む
折しもドンと隣り家が

七

倒れてこゝへぶつつかり
前へのめつて波の中
父と母とは浮き沈み
かくと見るより工兵は
鐵の船をば矢のよりに
こいで出て来て助けたが
家はユラユラ流れ行く

八

九、

流れ行くへを父母は
 船にすがつて手をあげて
 大事の太郎があの家
 死なば共に泣いたれど
 東がしらむ薄明り
 あかりにすかし見わたせば
 家は遠くに流れ行き

一〇、

今は影さへ波ばかり、
 一、こんな事とは露知らず
 太郎は尙もスヤ〜と
 寝ながらいつも母上の
 背にゆられて子守唄、
 二、ねんねんようおころりよ
 ねんねのお守はどこへいた

一三、 お山やまを越こにて里さとへいた
 里さとのおみやに何なにもろた
 でんぐ太鼓たいこに箏しやうの笛ふえ
 おきやがりこぼしに犬張子いぬはりこ
 いろくもらうたよい夢ゆめを
 見みつゝゆらく流れ行ゆく。
 一四、 行ゆく手てに見みゆる松まつの木きに

家はびったりひつかかり
 とまっただけれど長持ながもちは
 スラリとぬけて流ながれ行ゆく、
 一五、 これを目めがけてウヤ〜と
 蛇へびが四五匹ひきはひ上あり
 百足むひでもあがり猫ねこも亦また
 命いのちから〜泳およぎつく、

一六、猫や百足や蛇などに

守られながらスルくと

太郎がのつた長持の

船はどこまで行くじややら。

一七、こゝは河口、水兵は

汽船を海に横たへて

流るゝものをのがさじと

鳶口あげて待つ所

一八、ユラリくと流れくる

長持めがけ打こんで

グイと引よせ引あげる

見れば不思議や男の子

一九、太郎は此時漸くに

目をばさまして見まはすと

自分おのづかはすきな水兵すゐへいの腕うでに抱たかれて船ふねにゐた。

(完)

川上の木をむやみにきると、洪水になりま
すから、川上の木はむやみにきつてはなり
ませぬ。

洪水(上)

明治四十年九月十三日印刷
明治四十年九月十五日發行

◆◆◆定價金貳錢◆◆◆

著作者 真下飛泉
作曲者 三善和氣

發行兼印刷者 藤井孫兵衛

印刷所 京都印刷株式會社

京都市柳馬場二條下ル十番戶



發兌

京都市御幸町通姉小路(長電五二二)
京都市日本橋區橋正町(本局八八七)

五車樓

眞下飛泉先生作歌

定價一冊金貳錢郵稅六冊迄金貳錢

學校及家庭
用言文一致
叙事唱歌

武雄は出征して或は露營の月を眺め或は戦友をいたはりました。
遂に負傷して廣島まで歸り親切な看護をうけてよくなりました。
平和になつて凱旋しました。凱旋して歸つてから村長になるまで、
いさ／＼なことをあるのです。第七篇以下をいらんさい。

第一篇	第二篇	第三篇	第四篇	第五篇	第六篇
出征	露營	戦友	負傷	看護	凱旋
第十版七	第十五版四	第九版十	第五版廿	第十三版四	第二十版
第七篇	第八篇	第九篇	第十篇	第十一篇	第十二篇
夕飯	墓前	慰問	勲章	膏藥	村長
第十版	第八版	第八版	第十版	第七版	第七版

(全國市町村各書店に於て發賣致居候也)